

作文コンクール “Leading to the Future 未来に向かって～教育・夢・感動～”

2019年 最優秀賞作品「地域社会の一員としての学校を目指して」

大阪府立豊中高等学校 1年 高田一弥さん

私は幼い頃、気弱な性格でいたずらの対象にされることも多く、自分から意見を発することが苦手でした。しかし、あることとの出会いをきっかけに、中学校では生徒会長を務め、今では高校一年生ながらも生徒会副会長を任されるなど、学校の中心人物として自ら意見を発信していくようになったのです。

では、なぜ私はこのような変化を遂げることができたのでしょうか。その大きな要因として、地域行事への参加があげられます。弱い自分を変えたいと思っていた頃、かねてから興味があった地域の地車祭りに参加するようになりました。軽い気持ちで参加したのですが、私の自治体はお囃子のレベルが高く、強い団結力が必要とされました。そのため、様々な世代の方々が厳しい練習を行っていたのです。指導者の方は気難しく、先輩方にも緊張感が漂っていました。少し気を抜くだけでも随分指導されるため、入った当初は理不尽ではないかと嫌になることも多かったです。

しかし、これこそが私を変えてくれる大きなきっかけでした。嫌々ながらも通っていくうちに、その厳しい指導の中には、教え子に対する明確なビジョンがあることに気がついたのです。それは「お囃子の技術だけでなく、社会で役立つ子に育ててほしい」というものでした。厳しすぎるようにも思える指導なのですが、その中身は、挨拶、返事をする事、感謝の心を忘れないこと、目を見て話すこと、自分に自信を持ち堂々としていることなど、どれも当たり前のことでした。しかし、意外にもこの当たり前のことが難しく、身につけていない子が多いのです。私はこれに気がついた時、教育における地域の必要性を強く感じました。地域では学校でなかなか身につけることができない社会性や道徳心を、幅広い年齢層の方々から学び取ることができます。なにより、私自身も地域での教育によって社交的になり、自分の意見をきちんと伝えられるようになった一人です。そして今では、その自治体の副部長として、私が学んだことを次世代に受け継ぐ役目を果たしています。しかし、このような教育は一部の子どもにしか行き届いていないのが現状です。私はこうした背景から、全ての子ども達に学校での教育に加え、人として必要な感性を育む機会を提供できないかと考えるようになりました。

現在、学校では多様な専門スタッフを招き、教員を教育指導に専念させる「チーム学校」を作っていくという動きがあります。しかし、教育現場は学校だけではありません。私は、学校が地域との連携をより強化し、地域社会の一員として、その地域独自の文化や人々に触れさせる機会を作るべきだと考えます。生徒が地域からも様々な刺激を受け、豊かな社会性や道徳心を育める環境を提供できる学校こそが私の理想なのです。